

幼児の環境認識に関する一考察 － 幼児による写真投影法を用いて －

永井 理恵子*・河合 光利**

* 帝京短期大学・** 東京福祉大学短期大学部

A Study for Understanding of Environment in Childhood.

Rieko Nagai*・Mitsutoshi Kawai**

Abstract

The fundamental aim of early childhood education is to develop young children through their environment. Especially, things surrounding them, such as natural environment are the most important to develop their characters and personalities. We can see this point in the basic ideals of early childhood education in the course of Study for Kindergarten (MEXT 2018).

We (Nagai and Kawai) have been studying to make sure and prove it mentioned above for young children (3-5 years old kindergarteners) how to take in an interest and a curiosity from their surrounding environment.

One day, we took them to the fields and handed cameras each asking them to take photographs what they were interested in. They took digital photos a lot. Ever since we have had the presentations at the conferences (USEYC) once a year.

As the result of investigations from photos taken by young children, we have understood well how to recognize about their surrounding environment.

Young children have two points of view to their natural surrounding environment. One is the view to get the whole near by in the fields such as plants, trees, flowers, fruits, vegetables, etc. Another is to get the part. We have therefore proved that young children get the confined perspective first, then get wide view gradually.

At the same time, they are also able to obtain a sense of beauty from their surrounding natural environment.

We have found that developing their interest and curiosity about their surrounding natural environment, it is necessary to give them many opportunities and enough time to recognize and enjoy nature.

Keywords : Natural environment, digital photo, early childhood education

要旨

幼児と環境との関わりは、幼児の心身の調和的成長発達に寄与する重要な視点である。これについては平成 29 (2017) 年公示の新「幼稚園教育要領」においても重要な点として掲げられている。本報告書では環境の中でも特に自然環境を取り上げ、栽培植物（野菜や果実）を中心に、様々な自然環境と幼児との関係の実際を、年齢等の条件を踏まえた上で考察した。本報告書に記載されている研究は、平成 26 (2014) 年に開始し現在も継続して学会発表をおこなっているものを、総括したのである。この調査研究は、幼児が自らカメラを手にして周囲の自然環境を自由に撮影した写真をもとに研究をまとめている（写真投影法）。今後もこの研究は継続していく予定であるが、今までの調査研究から明らかになったことは以下の点である。すなわち、幼児が自然環境を捉える視点は全体を捉える視点と細部を捉える視点の双方があり、年少児においては近景を、年中児においては様々なものを、年長児になれば近景と遠景の双方の視点を取得していることが明らかとなったが、同時に年少時から植物を観察する機会をもった場合、幼児は早くから植物の全体と部分の双方を捉える能力が習得されることが理解された。さらに自然環境に注目することで美的視点も習得することや、自然環境の十分な認識には周囲の環境を十分に味わい感じ取れる時間的・精神的ゆとりが不可欠であることも明らかとなった。

キーワード：自然環境 写真投影法 幼児

1. はじめに

幼児と環境とのかかわりは、幼児の心身の調和的成長発達に寄与する重要な視点である。平成29(2017)年公示、平成30(2018)年施行の「幼稚園教育要領」第1章総則の第1「幼稚園教育の基本」では、「このため教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」ⁱと記された。この箇所は、前「幼稚園教育要領」(平成20年告示)においても「このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」ⁱⁱと記されていたことが確認できるが、この文中に「幼児が身近な環境に主体的に関わり」「環境との関わり方や意味に気づき」「これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし」の3点が新たに書き込まれた。新「幼稚園教育要領」における幼児と環境とのかかわりかたに関する指針では、幼児が自ら主体的に環境に接近する機会を設けることの重要性が注目され、幼児はこうして環境に接近することによって自ら環境に興味関心とともに内化しようとする存在であることが示されている。幼児がこの特性を十分に発揮できるためには、それを援助する保育者が幼児とともによりよい環境を創造することが重要であるともされていて、幼児と環境との望ましい関係の構築には保育者の役割が看過できないことも強調されている。

更に、新「幼稚園教育要領」第1章総則の第2「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」」の10項目のうち、幾つかの項目において、幼児と環境とのかかわりについて示唆していることも発見できる。すなわち、例えば(6)思考力の芽生えにおいて「身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる」ⁱⁱⁱと記述されたり、(7)自然とのかかわり・生命尊重において「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身

近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちながら関わるようになる」^{iv}とされたり、(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚では「遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる」^vとされていることなどである。これらの項目の内容においては、身近な事象としての「物」「自然」「動植物」「数量や図形、標識や文字」に幼児が主体的に興味関心を抱き、それらに対する興味や関心、必要感、愛情や畏敬の念などを生活のなかで自ずと抱くようになることが期待されている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は幼児が自ら育つ力を持っており、保育者の援助を受けながら発芽し引き出される能力であるが、保育者が援助するためには保育者自身が、幼児のなかにある興味関心を十分に理解していることが必要であろう。

さて、筆者らは、平成26(2014)年度より、写真投影法を用いて、幼児の環境認識について調査研究をおこなってきており、これは現在も継続発展中であるが、そもそもこの研究の発端は更に以前に遡って端緒をもっていた。河合は神奈川県川崎市多摩区において学校法人立のT幼稚園を経営しており、永井はそこで非常勤教諭として勤務した経歴を有している。このT幼稚園では、創立以来、自然とのかかわりを重視した教育を実践してきた。園所有の豊かな自然環境をもち、理事長・園長が農業に関する専門知識を有していたため、園児に通年で多様な自然体験、植物栽培を日々の生活のなかで経験できる機会を多く準備していた。在園児は、日々慈しんで大切に育てた野菜を実際に食する保育を日常的に受けながら成長する。園では昼食として給食と弁当を凡そ半々で導入しているが、野菜の収穫が与えられた時には昼食の主菜にしたり、味噌汁その他の副菜として提供したり、果実類が収穫されればそのまま食べたりジャムにしてパンケーキを焼いてそれに乗せて食したりもする。

後に河合はT幼稚園勤務を継続しながら大学教員を併任して多くの園の教育実践を目にするようになり、また永井は大学の専任教員として、幼児を取り巻く環境についての研究を深めるようになったが、その過程で河合と永井は、幼児の食のありかたには幼児の主体的な自然環境とのかかわりが深く関与しているのでは

ないかと考えるようになった。そこで筆者らは、平成22(2010)年度より、幼児の食育にスポットを当てた研究を開始した。おりしも平成17(2005)年に「食育基本法」が制定・施行され、当時、各方面から食育が注目されていた。筆者らの研究も、この「食育」に関連する研究として開始したのであった。

この一連の研究を学会で発表していたところ、フロアの参加者から、果たして幼児自身は、どのように思っている、食材としての野菜や果実を含む栽培植物や、更に広い自然環境を見ているのだろうか、「食育」研究が幼児の視点に沿わないかたちで推進されているのでは研究の意味が見いだせないのではないか、という意見が出された。

筆者らは、このフロアの意見に深い意義を見出し、我々の研究を改めて見直そうということになった。そこで考案したのが、幼児自身がカメラを持ち、興味関心を抱く対象を自ら撮るという手法であった。可能であればウェアラブルカメラを導入しようと試みたが頓挫し、防水対応の小型デジタルカメラを幼児のために準備し、幼児が自由に撮影するという方法を編み出した。のちになってこの手法が、「写真投影法」という一般名称で存在していることを知ったわけである。

こうした出発点から筆者らは当初、「幼稚園教育要領」のなかでも特に領域「環境」における「自然」「身近な動植物」に注目して研究を進めてきた。ところが、野菜・果実の栽培活動場面で写真撮影を幼児に求めるために保育室でカメラを手渡すと、園舎から園の栽培園に向かう途中でも、幼児は様々な対象を撮影する。対象物は多様な自然環境は勿論のこと、人々の暮らしの様子(干された洗濯物、下水溝、マンホールの蓋、道に落ちていた実など)も撮影しており、幼児にとって「環境」は全て同じ認識の上に乗っているという、考えてみれば当然のことに気付かされることとなった。我々は結果的に、領域「環境」に示されている「自然」「身近な動植物」を研究対象の中核としながらも、広く領域「環境」に記されている「数量や図形」「簡単な標識や文字など」にも幼児は自ら主体的に興味関心を抱いていることをも知るに至っている。

筆者らは、この研究を、学会における発表の形式で公表してきた。こうした経緯を踏まえて本研究報告は、この一連の研究を、報告書の形式にまとめ公表することを目的として記すものである。

2. 写真投影法による幼児の環境認識の実際

1で述べたような経緯と問題関心によって着手し進めてきた、写真投影法による幼児の環境認識の調査研究であるが、その学会発表の過程は以下のである。

1) 「食育活動を通した幼児と自然とのかかわり幼児は何を見ているのか」

日本乳幼児教育学会第24回大会 2014年11月

2) 「植物栽培を通した幼児と自然とのかかわり－幼児は何を見ているのか－」

日本乳幼児教育学会第25回大会 2015年11月

3) 「植物栽培を通した幼児と自然とのかかわり－幼児は何を見ているのか(2)」

日本乳幼児教育学会第26回大会 2016年11月

4) 「幼児の自然環境認識に関する縦断的研究(1)」

日本乳幼児教育学会第27回大会 2017年11月

5) 「幼児の自然環境認識に関する縦断的研究(2)」

日本乳幼児教育学会第28回大会 2018年12月

なお、これらの研究前に、1で述べたように「食育」に焦点を当てた学会発表を5本、おこなっている^{vi}。

これらの学会発表をとおして筆者らがおこなってきた研究の主題と、各回の内容、研究結果を、ここに述べていきたい。なお、学会発表の場では、幼児が撮影した写真を適宜、発表フロア配布資料と論文集に公表しているが、この報告書においては、諸般の観点から写真の掲載は控えることとする。また、学会では、各回の報告内容を視覚的に報告するに適したグラフ等も作成・添付して報告した。

筆者らは、上記5回の学会発表の前哨として、「食育」に関する研究を5回おこなっていた^{vii}。それらの研究はそもそも、幼稚園で実施される昼食(給食と弁当)の内容と、それに伴う幼児の食欲との関連に対する問題関心から発祥した研究課題であった。筆者らは、河合が運営するT幼稚園に加え、複数の私立幼稚園における昼食(給食と弁当)活動の実施形態、それに見られる幼児の食欲、保育内容と方法、幼稚園経営者の昼食実施に対する見解などを総合的に分析した。その結果、幼児の昼食における食欲の実態や、食に対する意識の在り方には、十分な活動量を満たす実践が展開することと共に、植物栽培活動をイベントや行事としてではなく日常的に導入し、幼児が自ら手入れや水やりをしながら育てた野菜や果実は積極的に摂取するというを明らかに読み取ることができた。

同時に、1でも述べたように、上記1)の学会発表の前年にフロアの参加者から受けた提言、すなわち、

幼児自身の観点から見た「食育」の研究が今後は重要なのではないかと、という視点を受けて筆者らは、1で述べたような検討を繰り返し、幼児によるデジタルカメラ撮影データを用いた研究方法を採用した研究に着手したのである。

ここで1)から順に研究の内容・方法と結果の考察を紹介することになるが、1)で初めて取り組んだこの研究は、予想を超えた成果を得ることとなった。植物栽培場面において幼児による写真撮影を継続的にこなう研究方法は、長期的に絶え間なく幼児に撮影を依頼し、それを常時、分析考察するという、こまやかな研究が求められる。河合が幼稚園長として園の教育活動全体を把握できる立場にあったことと、永井がT幼稚園近くに在住しており足しげく幼稚園に出向いて調査現場を見たり分析をおこなうことが可能であったことが幸いしてこの研究が実現し成立したといえよう。植物栽培活動は、年間の教育課程のなかで常時、何かがおこなわれているので、研究に際しては年間をとおして計画する長期的視点や、日々実際に保育をおこなう担任保育者との連携も不可欠である。もちろん撮影者は幼児であるから、幼児の活動を邪魔しないことや、幼児が気乗りしない時には撮影を強要しないなどの配慮が必要なのは当然のことであり、筆者らの思いとは異なる状況になることもしばしば発生する。これらの意味においてこの研究は、多くの難しさを伴うものであり、様々な方面での「ゆとり」を必要とする研究である。

このような前提条件を抱えた難しい研究であるが、1)で開始した当初から興味深い結果が得られ、遅々とした足取りながらも毎年、学会発表を続けて5年目を迎えた。発表の場では毎回、フロアの参加者から興味関心を持たれ、多くの意見が出され、それを検討内容に加えながら研究が継続発展してきた。こうした意味からすれば、この研究は、学会の場においてフロア参加者とともに成長し展開してきたものとも言えよう。

では、1)の研究から順にその概要を紹介する。

1)「食育活動を通した幼児と自然とのかかわり－幼児は何を見ているのか－」(2014年11月)

初回は、初の試みということもあり、まずは幼児にカメラを持ってもらい、撮影をしてもらうということが可能であるかどうかの検証からの着手となった。前記のように、本来なら幼児の手を煩わせずに調査したいと考えてウェアラブルカメラを購入し、導入に挑戦

したのであるが、これは撮影以前に一般に購入可能なカメラの形態が幼児の頭蓋骨のサイズに合わず装着不可能であることがわかり断念したのである。

筆者らは、河合の運営するT幼稚園において、この研究方法を試行した。当該園は、先代園長の時代から、園が所有する、園に隣接する農地を用いて、稲作や野菜・果実の栽培を、多種において長期的に実践に導入してきた。在園児は日常的に、週に3回以上は散歩がてら農園に出掛け、手入れをしたり、水をやったりといった活動をおこない、栽培植物との親しい関係性を築いている。収穫した米、野菜、果実は、もちろん余剰分は家庭に持ち帰るものの、基本的には昼食時や間食として、園で調理して、保育者や友だちとともに食べている。この筆者らの研究は、我々が初めて採り入れる研究方法であるため、こうした活動を十分に経験している幼児であるうえ、カメラという機器を使用可能であると思われる幼児を対象として選択した。年長児4名(男児2名、女児2名)にカメラを持つことを依頼し、本人の了解を得て、植物栽培活動の実施時に「なんでもいいから撮影して」と、規制を一切かけずに撮影を依頼した。本来ならば、全ての幼児を対象として調査をおこなわなければ、データとして十分な信憑性を有さないのは承前ではあるものの、実際問題として困難を伴う。そのため今回の調査では、特に様々なものに興味関心を示し、且つ、保育者や周囲の幼児によく発言をする幼児を基準とし、クラス担任保育者と相談して、カメラ撮影が可能と思われる幼児4名を筆者らのほうで選択した。

当時、筆者らは、この調査研究をまだ「食育」研究の延長線上にある研究として捉えていたことから、野菜栽培活動場面に限定して幼児に撮影を依頼していた。同時に、担任保育者に依頼して、その活動場面を中心に幼児の発話を聞き取ってもらい、撮影後に保育者から幼児の様子を聞き取る作業もおこなった。こうした多方面から、この研究方法の可能性を模索したが、この初年度の研究であった。調査実施回数は8回で、平成26(2014)年5月から同年7月までの約2か月の調査をおこなった。おこなった植物栽培活動は、主としてイチゴの収穫、ミニトマトとゴーヤの定植、キュウリとナスの収穫、ジャガイモの収穫、田植えなどであった。

幼児らは、分析するに足る枚数の撮影を残した。男児2名の写真は撮影枚数が多く、内容としては、収穫物は勿論、畑全体の写真や、稲そのものを近接で撮影

したものなどもあった。男児では食材となる収穫物のみならず、植物の生育環境や過程にも興味を持ってみていることが読み取れた。一方の女児は、撮影枚数は少なく、写真の対象は収穫物を中心とした植物そのものが多くを占めていた。また、筆者らが実施前に危惧していたところの、「友人の撮影にばかり執心して自然環境を撮影することを失念するのではないか？」という懸案事項は払拭された。幼児（年長児）は全員において、人間の撮影に執着することなく、自然物を撮影していた。

この回の初回調査では、男女児の撮影枚数の大きな開きと、対象物を見る視点の幅の違いが顕著に見られた。いずれにしても、幼児（年長児）にカメラ撮影は様々な意味において可能であることが確認された。振り返れば、この頃は筆者らもまだ初めての研究に着手したばかりであり、分析考察も初歩的なものであった。

2) 「植物栽培を通した幼児と自然とのかかわり (2) - 幼児は何をみているのか -」 (2015年11月)

二回目となる今回は、前回の研究で対象児とした年長児は卒園したため、検討の結果、年中児に降ろして実施することとした。年中児での調査が可能であれば年長児まで二年間継続した調査研究が実施できるためである。それであれば、撮影枚数や撮影対象物が年齢による発達段階と関与しているかどうかを検証できることにもなる。

年中児を対象とした今回も男女児各2名、計4名を調査実施対象児とした。やはり調査対象児の人数は課題として筆者らの意識下には存在していたが、前年度の調査で、4名の幼児だけでも継続調査するとなれば相当数の写真が撮影されることとなり、我々2名しか分析者がいない研究では幼児4名がデータ量として限界であるという判断をした。

今回の調査では、データ収集量は十分ではなく、撮影日が2015年5月から6月の一か月余、三回の撮影となった。撮影内容は、イチゴの収穫、ジャガイモの収穫、キュウリとナスの収穫である。幼児が撮影した枚数は、男児2名が100枚程度、女児2名は50枚程度であった。

今回の調査では、前年度の調査においては撮影対象物が筆者や担任保育者の特別な指示なくして凡そ植物に限定されていたのに対し、年中児では植物に限定するのではなく、畑全体、人物、壁、道路脇の側溝など、畑を取り囲む空間の全体を撮影したり、畑と人を重ねて撮影しようとした様子が窺える写真が多く見られ

た。この結果は考えるに、年中児は局所的・限定的なものを捉えようとするよりも、まず先に自分の周囲にある環境の全体を多様に把握しようとする傾向があることを意味すると判断できる。それはやがて年長になり継続される幼稚園生活における自然環境とのかかわりが、幼児の興味関心の方向を局所的で限定的な、焦点化されたものに変容させていく可能性があることを示唆していると想定された。男女児の撮影枚数の違いとしては、年長児の結果と同様に、男児が女児より圧倒的に枚数が多く、女児は男子の半数程度の枚数に限られていた。撮影項目を詳細に分析したところ、男女とも共通して、畑全体、人物、その他、地面の順で枚数が多かったが、野菜、空、景色といった項目では、女児よりも男児のほうに多い枚数が確認された。このことから、男児は女児よりも周辺環境の全域を捉えようとする傾向があることが読み取れた。この年度の調査では、特に撮影対象に人物が多く見られたことも興味深い。この事実には、幼児と自然環境のかかわりには、常に両者を繋ぐ媒介となる保育者や仲間との共同活動としての植物栽培を意識する必要があることが意味されている。

以上のようにこの年度、年中児を対象として調査をおこなった結果、前年度に実施した年長児を対象とした同様の調査研究とは異なる結果が示された。そのため筆者らは、次年度はこの年度に調査を実施した年中児を追って、年長児になった同じ幼児を対象として研究を継続することとした。

3) 「植物栽培を通した幼児と自然とのかかわり (2) - 幼児は何を見ているのか -」 (2016年11月)

続く2016年度の第三回目にあたる調査研究では、前年度の結果を引き継ぐかたちで、同じ幼児4名（男児2名、女児2名）を対象として調査研究をおこなった。前年度の研究発表で調査対象日とした3回の植物栽培活動日に続く、2015年10月のカブの種まきから2016年6月のジャガイモ苗植えまでの長期に亘る植物栽培活動を、今回の調査対象期間とした。この間におこなった調査では、カブの種まき（2015年10月）、サツマイモ掘り（同年同月）、ジャガイモの種イモ植え（2016年3月）、トマトとゴーヤの苗植え（同年5月）、ジャガイモ掘り（同年6月）をおこなった。今回もこれまでと同様、対象児の日常の姿や野菜収穫の当日の特徴的な発言などについて保育者から聞き取りをおこない、幼児の撮影した写真データと合わせて分析した。この回になると幼児の撮影した写真の枚数は平均150

～200枚程度が確認されるようになった。

年中前期では既に2)で見たように幼児の興味関心は植物に限定したものではなく幅広い対象に向けられていることが理解できたが、年中前期から継続して追跡をおこなった年中後期では、幼児が植物を捉える視点がそれまでの観点に加え、畑、畝、葉、野菜といった画像も多く見られるようになってきた。植物の主要部分に視点が集中していつていることが考えられる。年長に進級してからも、年中後期に見られた人物+植物といった画像も多く見られ、そこに新たに葉、畝、野菜といった植物の部分的な画像が加わる傾向にあることが確認された。

撮影枚数については、前2回の調査では男児が女児を上回る数を撮影する傾向が見受けられたが、今回の調査では男女の差は見受けられなくなった。この結果から、女児であってもカメラを触る機会があれば撮影枚数は増えることが明らかとなり、枚数が幼児の興味関心の水準を必ずしも示しているわけではない事が確認された。

ここまでの研究で明らかになったことは、以下のとおりである。幼児は年中段階においては、自分の周りがある環境の全体を理解しようとしている傾向がある。年長になるに連れて特定の対象に注目していくことが確認された。また、植物とのかかわりから、幼児は人物、すなわち保育者や仲間を媒介としながら、自らの興味関心に基づく植物への視点をもつように成長していく姿が示された。

4)「幼児の自然環境認識に関する縦断的研究(1) — 3, 4歳に見られる活動事例—」(2017年11月)

第4回となる2017年度は、前年度までの結果を踏まえて、新たな手法による取り組みに着手した。すなわち、これまで年長児、年中児からの年長児を研究対象としてきたが、さらにその前段階の年少児は、植物に対してどのような視点を持ち、かつ認識をしているのかが筆者らの学究の関心事となった。さすがに年少児では、この研究方法には困難が伴うのではないかという見解が筆者らのなかにあったので、試験的に4月の時点で年少児に撮影の機会を設けて検討することとなった。

筆者らの予想では、年少児段階では年中児にも増して特定の植物に興味関心が薄く、焦点の定まらない写真ばかりが集まるのではないかと思われた。こうした想定のもとに我々は、過去3年間と同様、男女児各2名ずつを抽出し、カメラを持って撮影する機会を設け

たところ、一応は写真と呼べるものが撮影されることが確認できた。筆者らは、それまで以上に幼児の気持ちに委ねること、強制的にならないことを担任保育者と十分に話しあったのち、撮影を開始した。なお、今回、選出した幼児らは、性格に個性はあるものの、保育者や周囲の幼児とよくコミュニケーションをとり、また周囲の様々なものに興味関心を示す幼児を、担任保育者と相談して選出した。

なお、今回の研究から、栽培活動のみに限定せず、幅広く自然環境に幼児が接する機会にも、時に撮影を導入することにした。前3回の調査研究から、幼児の自然に対する視点は焦点化されたり広がりをもったりしていることが読み取れたため、広く自然環境全域に向けての幼児の視点を調査することが必要であると考えたからである。

今回は、2017年5月に5回、6月にも5回、計10回の機会を設けた。5月には畑の観察の他、緑化公園、農園散歩も含まれた。6月には、畑観察に加え、紫陽花寺、公園散歩の機会にも撮影を依頼した。

この年度の研究においては、年少児でも写真の撮影は十分に可能であることを確認したうえで研究をおこなったのであるが、「撮りたい」時と「撮る気分でない」時の差が幼児一人ひとり顕著であった。気分の乗らない日には決して撮影を強要しなかったため、撮影の枚数は時によって、幼児によって大きなばらつきが見受けられた。

合計10回の撮影の機会で撮られた写真は、男児2名の撮影総数が91枚、女児2名の撮影総数が111枚であった。やはり年少児の入園直後ということもあり、撮影枚数は決して十分ではなかったが、この時期の年少児がこれだけの枚数を撮影したことには驚かされた。この時期の年少児の写真には、大きな特徴があった。男女児ともに、「撮りたい」と(無意識下であろうと思われるものの)感じた対象物を画面一杯に接近して撮影している写真が多く見られた。草、花、田んぼ、地面、空、保育者の足元などが、画面に大きく撮影されていた。一方、保育者や他の幼児が写っている写真は想像以上に少なかった。

今回の調査で注目に値する点があった。それは、年少児の場合は特に、保育者の言葉がけが撮影対象の選択に大きな影響を与えているということである。考えてみれば至極当然のことではあるのだが、保育者が「この花は〇〇という名前なのよ」などと言って特に言葉がけをおこなった対象物を、年少児は多く掴んで撮影

していた。この点から、幼児の自然環境への興味関心は、年少児の段階から、幼児にわかりやすい言葉で伝え、意識をしっかり持てるように援助することが、保育場面で求められていることが改めて確認された。この年度における年少組の担任保育者は、少なくとも週三回、天気がよい限りは年少児を畑に連れて行っていた。そして畑では、まず一定時間、自由にゆったりと畑を見せていた。そして、そののちに、保育者が野菜や花などを手に取って年少児全員に見せ、その後順に一人ずつ手に持たせて体験する時間を準備していた。このような、幼児と自然環境とが会おう時間と機会を保育者が自覚的に意識して用意することにより、幼児の自然環境に対する興味関心の芽が育つ第一歩になることが、今回の調査で明らかとなった。

5) 「幼児の自然環境認識に関する縦断的研究 (2) — 4, 5 歳に見られる活動事例 —」(2018 年 12 月)

最後に報告するのは、昨年度の発表以降、継続しておこなってきた、同じ幼児らを対象とした調査研究の内容と結果である。

今回の最新となる調査研究では、昨年度の学会発表に用いたデータ以降に蒐集したデータを用いて考察した。対象となる幼児は昨年度の研究で対象とした4名で継続観察としたので、途中で年中に進級している。

観察は、2017年8月末に1回(畑の観察)、10月に4回(畑の観察、サツマイモ掘り、生田緑地、畑と水田の観察)、11月に1回(畑の観察)、12月に3回(畑の観察、農園観察)、2018年3月に1回(生田緑地)、年中に進級して4月と5月に畑の観察を各1回の、計10回であった。今回の幼児の撮影枚数は、男児2名が各100枚前後、女児2名が各140枚前後と、年中児としては十分な枚数を撮影していた。興味深いのは、女児が男児の1.5倍もの枚数を撮影したことである。これをどのように分析するかは筆者らで検討中であるが、女児が男児を大きく上回ったことは驚きであった。

今回の調査では、以下の4点が特徴となって現れた。第一に、非常に興味深かったのは、植物を見る際の視点である。どの幼児においても、遠くから全体を見る視点と、接近して細部を見る視点が、往復関係をもって確認された。当該幼稚園では先にも述べているように、園児はしばしば園の畑に出かけて観察しており、カメラを持って出かけているのはそのごく一部の回である。身近に自然に接する生活をとおして、植物の全体的特徴や状態を把握し、それと並行して細部も観察するという行動をとっていることが、今回撮影された

写真から読み取れた。

これまでの研究で我々は、幼児の対象を見る視点には調査年によって違いがあることを掴んでいた。すなわち、写真撮影法による研究の第一回調査では、調査対象児は調査初回体験の年長児で、年長児が撮影した写真には遠景による植物の全体像を捉えたものと、近景による植物の部分の部分を捉えたものが混在していた。第二回の調査では調査対象児は調査初回体験の年中児であり、撮影した写真は遠景のものが多くを占め、近景のものはごく一部に留まっていた。第三回の調査の調査対象児は昨年度から体験している年長児で、前年度では殆ど見られなかった近景写真が多く確認され、遠景と近景が同数程度になった。これは、第一回調査で見られた結果と類似したものとなったので、全体を捉える視点と細部を接近して捉える視点は年長児になると出現する特徴ではないかと考えられた。続く第四回の調査対象児は、調査初回体験の年少児であった。年少児の対象物を見る視点の特徴を初めて調査したわけであるが、それまでの3回の調査では見られない特徴があった。すなわち、この年度に調査をおこなった年少児は、遠景によって撮影された写真が殆ど見られず、植物を含む環境を撮影した写真が対象物に極めて接近した近景写真ばかりを撮影していた。この結果は、第二回の調査で、調査初回体験の年中児が示した結果と全く異なるもので、年中児では遠景写真が多くを占めていた一方、第四回の調査で対象とした調査初回体験の年少児では近景写真ばかりが確認されたのである。いずれもこの調査をおこなうのが初めての幼児でありながら、年中児と年少児で全く相反する結果が見られたことは、非常に興味深かった。

そして迎えた第五回の調査であったわけだが、調査対象児は年少時から経験している年中児であった。年齢としては第二回の調査で対象とした年中児であるが、経験としては第三回で調査の対象とした年長児と同じ二年目の幼児たちであった。この、調査経験二年目の年中児が撮影した写真が実に興味深いものであったのである。その写真群は先に述べたように、遠くから対象物を見る遠景視点による写真と、接近して対象物を見る近景視点による写真が混在したのに加え、単に遠景視点と近景視点が同居しているというだけではなく、一つの対象物に対して遠景から近景へと連続ないしは往復した視点による写真が続いて確認できたことである。第五回調査の対象児は第二回調査の対象児と同じ年中児であったが、第二回調査で対象とした

年中児では遠景写真ばかりであったのに対し、第五回調査で対象とした年中児では第一回調査で対象とした年長児に見られた特徴である、遠景視点と近景視点による写真がほぼ同数で見られたのである。すなわち、同じ年中児でありながら、この調査の経験年数が二年目になっていた年中児は、年中段階で既に年長児の特徴であった視点の広い幅を身につけていたことが確認できたのであった。もちろん、調査の性質上、同じ幼児を対象にして調査研究ができるわけではないので、結果はあくまで完全に正確なものではなく、推測の域を出ないものとも言えよう。しかしながら、自然環境を注目する機会を多く経験した幼児が、より一層、環境に対する幅広い視点を早期に習得する可能性があることを、我々の調査結果が示唆しているとも言えよう。

第二に興味を持ったのは、今回、年中児が撮影した自然環境の写真の中に、光と影の陰影や構図などの点で、非常に美的なものが何点か確認できた点である。近所の生田緑地に出かけた際に、高い樹木林の下から見上げた枝の遠くに見える空や、森の色づく木々に日差しが刺しこむ様子などを、広角レンズで撮影しているかのような写真が発見された。その一方、極めて接近して撮影されたキノコや、地面に落ちた鮮やかな橙色の柑橘類の果実、カマキリなどの近接写真も見られた。年中児は、自然のなかに、美しさを感じとっていることが顕著に確認された。自然環境に刺激を受けて、カメラという媒体を用いて表現活動をしていることがわかり、領域「環境」と「表現」との密接な関連性を改めて確認することができた。こうした美しさを感じさせる写真は、これまでの調査研究で蒐集された写真データの中に、筆者らが明確に認識するような事例は出現していなかった。撮影をおこなった幼児が、年少の極めて幼小期から身近な環境をカメラのフレームをとおして見るという行為を繰り返しておこなってきたことにより、年中児になって美的感性と科学的な視点の双方が環境刺激と自らの撮影活動によって開花してきたのではないかと考えられる。

第三に、今回の記録写真に多く出現していたのが、自然環境ではない人工物を撮影した写真である。地面のタイル、道路の舗装、公園に置かれている古い車両とオブジェ、トイレの標識など、領域「環境」で示されているところの多様な環境が、我々からの一切の指示なく、幾つも発見された。人工物も、環境の一つとして、幼児に強いメッセージを発しており、今回撮影した年中児たちは、それらをキャッチしていることが

明らかとなった。こうした人工物が多く出現してきたのも今回の調査が初めてである。撮影の機会を増やしたために出現したのか、やはりカメラのファインダーを通すことで環境を見つめる独自の視点が育ってきたのかは、まだ定かではない。今後の研究で考察を深めていきたい。

最後に、今までの調査のなかで筆者らが強く感じてきたことを述べたい。それは、幼児が環境を認識するためには、様々な意味での「余裕」「ゆとり」といったものが必要であるということであり、特記したい事項としては「時間的余裕」がある。幼児が周囲の身近な環境を十分に把握するためには、幼児がそれを味わい楽しむ時間が必要である。自然に触れてゆったりと過ごす時間、よく見たり、においをかいだりすることが許される雰囲気、一緒に見てくれる保育者や友人を呼んだり、順番を待ったりできる時間。こうした時間的余裕がないことには、幼児は環境を自分の心に採り入れることができない。この事実は、経験の豊かな保育者が幼児と同行している時と、補助として保護者が幼児に関わっている時との時間の用い方の違いから気付かされた。このことが明らかとなった状況について説明しよう。今回の調査対象児のなかに、常日頃、興味深い写真を多く撮影していた女兒が1名おり、筆者らはこの女兒の活動・写真撮影場面の様子を注意深く観察していた。保育者が離れて一人になっている時にこの女兒は、対象とする植物に強い興味を示している様子を見せ、一人でじっと植物を観察し、カメラを向けていた。これを常に繰り返していたのだが、ある調査日、保育補助に来ていた保護者がこの女兒の傍で過剰なかかわりをおこなっており、拙速に活動を進めようとするかかわりが見られた。保護者が過剰なかかわりを女兒にする度に女兒の植物に向けられた意識が中断され、幼児なりの考究が深化・発展していかない様子が観察された。当然、当該日に撮影された写真は、女兒が何に注目しているかが不明瞭で曖昧な写真ばかりが残されていた。この事実の発見は我々に、幼児教育は十分な「余裕」と「ゆとり」を留意することと、傍から見守り援助することが非常に重要であることを気付かせるものであった。

3. おわりに

本報告書において我々は、これまで筆者らが継続的に年度を跨いでおこなってきた、幼児の自然環境認識の実際調査の過程を整理し、全体をとおして振り返る

ことができた。幼児が撮影した写真を見る事により、以下の点が明らかとなった。

幼児は、環境を十分に見たり体験したりすることによって、全体的に、また部分的に、環境を内面に採り入れていくことが可能となる。そのために我々は、幼児が十分に環境に親しむ条件を整え、幼児とともに自然に親しみ、見守りながら、そして時には幼児に提言もして環境に対する視点を提供することが必要である。

また、女兒がカメラという機械に対し、一般に興味関心を抱きにくいことが示されたが、それは必ずしも、変化しない事実ではない。機械に慣れてくるに連れて、撮影した対象物の魅力に動かされて撮影をするようになり、いったん撮影するようになれば、女兒も驚くほど芸術的な写真も撮るようになることも確認できた。

今後もこの研究は、継続的におこなう予定である。来年度は現在調査対象である年中児が年長児になっても継続し、撮影三年目となる幼児の撮影写真が示す結果を確認する。筆者らは、もし可能であれば、現在の調査対象児が卒園後も、小学校課程での自然認識力の成長過程を小学校と連携して追跡してみたいと考えている。

- i 平成29年告示「幼稚園教育要領」フレーベル館 p.5
- ii 平成20年告示「幼稚園教育要領」フレーベル館 p.4
- iii 平成29年告示「幼稚園教育要領」フレーベル館 p.7
- iv 同上
- v 同上
- vi 日本乳幼児教育学会第7回大会発表「幼稚園における幼児の昼食に関する研究(1) —昼食摂取量に影響を及ぼす要因についての一考察」永井理恵子 1997年11月
同学会第20回大会発表「幼稚園における幼児の昼食に関する研究(2) —「食」への意欲を育てる保育① T幼稚園の事例を通して」河合光利、永井理恵子 2010年11月
同学会第20回大会発表「幼稚園における幼児の昼食に関する研究(3) —「食」への意欲を育てる保育② I幼稚園の事例を通して」永井理恵子、河合光利 2010年11月
同学会第21回大会発表「幼稚園における「食」の衛生に関する研究(1)」河合光利、永井理恵子 2011年6月
同学会第22回大会発表「幼稚園における「食」の

衛生に関する研究(2)」河合光利、永井理恵子
2012年12月

vii 全て同上

参考文献

- 榎沢良彦、入江礼子編著 『保育内容 環境』建帛社 2018
- 奥井智久編著 『子どもと環境』三晃書房 2004
- 柴崎正行・若月芳浩編 『保育内容「環境」』ミネルヴァ書房 2009
- 高内正子監修、上中修編著 『保育実践に生かす保育内容「環境」』保育出版社 2015
- 三宅茂夫・大森雅人・爾浩明編著 『保育内容「環境」論』ミネルヴァ書房 2010